

# エミール・ゾラと人権同盟

—彫像をめぐる—

Émile Zola et la Ligue des droits de l'Homme : le sujet des statues

寺田 寅彦

TERADA, Torahiko

## はじめに

エミール・ゾラ (Émile Zola, 1840-1902) は19世紀フランス文学を代表する作家であるが、その活動はたんに文筆活動のみならず文筆家協会会長のような活動<sup>1</sup>や、ドレフュス事件でのドレフュス擁護のような社会運動につながるものと多岐にわたっている。いずれの活動もゾラという作家の全体像を理解するうえで重要であるが、研究者がそれらの活動の何を重視するかは時代によって異なっていた。その例を1968年2月7日付の『ル・モンド』紙 (*Le Monde*) の記事に見てみよう。

世界各地からゾラ研究者が数多く集まり、ゾラのコロキウムに集結していた。これはエミール・ゾラの友の文学会、マルクス研究センター、ピエール・アブラハム率いる『ユーロップ』誌の3者の旗振りで国立教育研究所において開催されたものである。この会合から受ける全体的な印象としては、ゾラが、その死後65年を経て、決定的にその読者層を見出し (1967年2月15日付『ル・モンド』紙を参照)、そしてその批評家たちも見出したということだ。[中略]ここではマルクス主義が問題となっていたのだろうか? 本来のマルクス主義批評は、当時の歴史的、社会的、経済的な現実とのつながりの何点かにかかわるものを除いて、ゾラ作品に適用されうる点を容易には見出せないようだ (おそらくバルザック作品への適用ほど容易には見出せない)。[中略] いや、我々にとって、ゾラは別のものなのだ。なによりも1人の作家、1つの作品なのである。コロキウムの第2セッションからゾラ作品におけるテーマや構造、イメージ、形式についての研究が見事に成立していたことをここでは喜ばなくてはならない<sup>2</sup>。

『ユーロップ』誌 (*Europe*) はロマン・ロラン (Romain Rolland, 1866-1944) が中心になって1923年に設立された文芸誌で、編集方針に平和主義を標榜したこともありその後は左翼系文筆家が多く寄

1 1891年から94年、さらに95年から96年にゾラは会長職を務めた。

2 Jean Raymond, « Zola devant la critique moderne », *Le Monde*, daté du 7 février 1968. « De nombreux « zolistes », venus de tous les horizons, s'étaient donné rendez-vous au colloque Zola qui vient se tenir à l'Institut national pédagogique à la triple enseigne de la Société littéraire des amis d'Émile Zola, du Centre d'études et de recherches marxistes et de la revue *Europe*, que dirige Pierre Abraham. L'impression d'ensemble qui se dégage de cette rencontre est que, si Zola, soixante-cinq ans après sa mort, a trouvé définitivement son public et ses lecteurs (voir à ce sujet *Le Monde* du 15 février 1967), il a trouvé aussi ses critiques. [...] S'agissait-il de marxisme ici ? Il semble qu'une critique proprement marxiste ne trouve pas aisément son point d'application sur l'œuvre de Zola (moins sans doute que sur celle de Balzac), sauf en ce qui concerne certains de ses rapports avec la réalité historique, sociale et économique de son temps. [...] Mais pour nous, Zola c'est autre chose. C'est d'abord un écrivain et une œuvre. On doit se féliciter ici que l'étude des thèmes, des structures, des

images, des formes dans l'œuvre de Zola ait été, dès la deuxième séance du colloque, mise en excellente place.» (規訳がない場合、和訳はすべて拙訳)

3 Marie-Cécile Bouju, *Lire en communiste. Les Maisons d'édition du Parti communiste français 1920-1968*, Presses universitaires de Rennes, 2010, pp. 197-216 (« Chapitre IX. 1944-1947 : Le temps des désillusions »).

4 Jean Raymond, *op.cit.* « Les interventions de M. Baguley à propos du *Ventre de Paris*, de Bonnefis sur la valeur et la signification des images animales chez Zola, de M. Dezalay sur l'image du souterrain dans ses romans, donnèrent l'exemple d'analyses thématiques rigoureuses et cohérentes et montrèrent à l'évidence que c'est dans l'Université, et non en dehors d'elle, que se développe aujourd'hui la critique moderne dans ce qu'elle a de plus créateur. »

5 Madeleine Rebérioux, « Zola et la critique littéraire française socialiste et anarchiste, 1894-1902 », in *Europe*, n° 468-469, avril-mai 1968, pp. 7-16. ルベリウの伝記事項と評価については以下の記事を参考している。Vincent Duclert, « Madeleine Rebérioux, historienne de parole et d'acte », in *Cahiers Jaurès*, n° 174, avril 2004, pp. 17-23.

6 Kohei Saito, *Karl Marx's Ecosocialism: Capital, Nature, and the Unfinished Critique of Political Economy*, Monthly Review Press, New York (U.S.A.), 2017.

稿していた。反ファシストの主張ゆえに第二次世界大戦前夜には共産主義者の投稿も多く、戦中に一時中断されたのちに大戦後にルイ・アラゴン (Louis Aragon, 1897-1982) の尽力で1946年に復刊した際にも編集にかかわる者の半数が共産黨員だった<sup>3</sup>。引用に名前が挙がるピエール・アブラハム (Pierre Abraham, 1892-1974) は1949年から1974年のその死まで『ユーロップ』誌の発行人であった。自らも共産黨員ではあったが、引用の内容やこのコロキウムの特集号である『ユーロップ』誌第468・469合併号の趣旨からも理解されるように、共産党一色ではない開かれた文芸誌として『ユーロップ』誌を発刊しており、そのバランスの取れた編集方針は上述の『ル・モンド』紙の記事が、バグレー (David Baguley, 1940-2014) やボンヌフィス (Philippe Bonnefis, 1939-2013)、ドゥザレ (Auguste Dezalay, 1932-) のような大学で活躍する文学研究者のテーマ研究を挙げて「今日では現代批評のもっとも創造的なものが発展するのは大学においてであって、そこ以外にはないことを明らかにしている」とまとめていることから理解できる<sup>4</sup>。

この記事がなによりも強調しているのは、ゾラは大学という高等教育機関で学術的に読まれるべきだという現在ではあまりにも当然のこととなっている研究動向であり、同時にマルクス主義的なゾラ読解の「終焉」である。もちろんこれは記事を執筆したジャン・レモン (Jean Raymond, 1925-2012) 自身がプロヴァンス大学で当時教鞭を執っていたことと無関係ではないだろうが、それでもこのような論調に1950年代以前、とくに第二次世界大戦以前には明らかに存在していたゾラへの社会・共産主義的な視座からの関心を積極的に排除しようとする意識を読み取ることは難しくない。このコロキウムの口火を切った発表は、ジャン・ジョレス (Jean Jaurès, 1859-1914) をはじめとする19世紀末の社会・共産主義の専門家で自身も共産黨員であったマドレーヌ・ルベリウ (Madeleine Rebérioux, 1920-2005) の「ゾラと社会主義・無政府主義フランス文学批評1894-1902」であり<sup>5</sup>、しかもルベリウ自身は当時はすでにソルボンヌ大学主任助手 (専任講師に相当) であったにもかかわらずレモンの『ル・モンド』の記事では完全に無視されている。このことから、大学関係者の中でもとりわけ文学研究者による文学研究にゾラ研究の主軸が移った (主軸が移ったという既成事実を作った) ことを理解できるのである。

むろん現在ではマルクスの理解自体への見直しがある一方で<sup>6</sup>、ドレフュス事件を介した社会批評としてゾラを理解する動きもあることから、近年ではゾラを社会主義・共産主義思想の流れから再度読み解く機運はあらためて高まっている。ルカーチのゾラ論を再読するオレリ・バルジョネ (Aurélien Barjonet, ? - ) や、ゾラを社会参加の

文学として今日ならではの読解を試みるジョヴァンニ・ドトリ (Giovanni Dotoli, 1942-) のゾラ論などがその例として挙げられる<sup>7</sup>。ただこれらの研究はゾラがどのように20世紀前半において理解されていたかに必ずしも焦点を当ててはいない。そこで本論では、ゾラの社会貢献を世に広めるべく尽力した人権同盟 (La Ligue des droits de l'Homme) の活動をゾラの彫像設置の経緯を考察しつつ検討する。本論ではこの人権同盟の活動の影響がゾラの旧友ポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-1906) にまで及んでいたことを確認し、もともとドレフュス大佐 (Alfred Dreyfus, 1859-1935) とゾラを擁護すべくドレフュス事件を機に結成された人権同盟が、ゾラ没後どのようなゾラのイメージを形成しようとしていたかを確認する。とりわけゾラの故郷ともいえるエクス=アン=プロヴァンスでの2つの胸像の除幕式、ならびにパリに設置されたゾラの立像をめぐるさまざまなエピソードから、当時のゾラがとりわけ『四福音書叢書』(*Les Quatre Évangiles*) の作者として理解されていたことを検討する。いわばゾラをめぐるどのような記憶の場が形成されていたのかを明らかにするのが本論の目的である<sup>8</sup>。

## 1 ゾラ没後の人権同盟の活動

エクス=アン=プロヴァンスで1906年と1911年に執り行われたゾラの胸像の2つの除幕式を取りあげる前に、ゾラと人権同盟の関係、とりわけゾラの死後に人権同盟がどのような活動をしたかを確認したい<sup>9</sup>。人権同盟の公式な設立は1898年ではあるが、1894年からすでに揺籃期ともいえる時期があり、また設立の契機がドレフュス事件であったとはいってもその創設期からドレフュス事件にとどまらないさまざまな人権問題に立ち向かって活動を行ってきたことはよく知られている<sup>10</sup>。それでも人権同盟は、ゾラの死後、その名声を称揚することで反ドレフュス派の侮辱からゾラを守り、またその作品を擁護すべく積極的に活動を展開した。たとえばゾラが死んだ1902年、その葬儀で国民教育省大臣のジョセフ・ショミエ (Joseph Chaumié, 1849-1919)、文筆家協会会長のアベル・エルマン (Abel Hermant, 1862-1950) に続いて「友人たちを代表して」として弔辞を読んだのが作家のアナトール・フランス (Anatole France, 1844-1924) だったことが例として挙げられる。ゾラの長年の友人といえ、公私ともに付き合いの深かった出版業者ジョルジュ・シャルパンティエ (Georges Charpentier, 1846-1905) や音楽家のアルフレッド・ブリュノ (Alfred Bruneau, 1857-1934)、彫刻家のフィリップ・ソラリ (Philippe Solari, 1840-1906)、また当時は疎遠になっていた

7 Aurélie Barjonet, « La thèse des deux Zola », in Lars Schneider, Jing Xuan, *Anfänge vom Ende. Schreibweisen des Naturalismus in der Romania*, Wilhelm Fink Verlag, München (Allemagne), 2014, pp. 61-78. Giovanni Dotoli, *Zola écrivain du XXI<sup>e</sup> siècle*, L'Harmattan et AGA, 2020.

8 本論文の第2章は国際シンポジウム「セザンヌとゾラの創造的関係を再考する」(於: 京都工業繊維大学, 2018年12月2日)での発表「セザンヌとゾラ: 記憶の場」をもとに加筆したものである。該当の発表と本論文は科学研究費助成事業「エミール・ゾラとフランス人権同盟」(基盤研究(C)(一般)、課題番号: 16K02527)の支援を受けている。

9 詳しくは以下の論文を参考のこと。寺田寅彦「ゾラの没後十年と日本近代文学」(東大比較文学会『比較文学研究』第100号、2015年、63-80頁)。

10 人権同盟創設期の活動ならびにゾラ裁判と人権同盟のつながりを知るには次の文献の第1章がとりわけ参考になる。Emmanuel Naquet, « Chapitre I, Au commencement était l'affaire Dreyfus... La genèse, la fondation et la confirmation de la Ligue des droits de l'homme avec Ludovic Trarieux (1894-1903) », *Pour l'Humanité. La Ligue des droits de l'homme, de l'affaire Dreyfus à la défaite de 1940*, Presses Universitaires de Rennes, 2014, pp. 43-146.

11 Anatole France, « Discours de M. Anatole France au nom des amis », in *Discours prononcés aux obsèques d'Émile Zola, le 5 octobre 1902*, Eugène Fasquelle, 1902, p. 35. « Zola n'avait pas seulement révélé une erreur judiciaire, il avait dénoncé la conjuration de toutes les forces de violences et d'oppression unies pour tuer en France la justice sociale, l'idée républicaine et la pensée libre. [...] Il en sort un nouvel ordre de choses fondé sur une justice meilleure et sur une connaissance plus profonde des droits de tous. »

12 Alain Pagès, *Zola et le groupe de Médan*, Perrin, 2014, p. 400. « La plupart sont des militants de la cause dreyfusarde venus rendre hommage à l'auteur de « J'accuse ». Le lieutenant-colonel Picquart est présent, ainsi qu'Alfred Dreyfus accompagné de son épouse, Lucie. »

13 エミール・ゾラの会 (L'Association Émile Zola) は1909年に結成され、1910年から1913年まで『会報』(*Bulletin de l'Association Émile Zola*)を発行している。会はいったん解散した後、1921年にエミール・ゾラの友の文学会 (La Société littéraire des amis d'Émile Zola) として再結成され、『会報』(*Bulletin de la Société littéraire des amis d'Émile Zola*) は1922年から1938年まで発行された。このエミール・ゾラの友の文学会は、『会報』の中でもエミール・ゾラの友の会 (La Société des amis d'Émile Zola) と略記されることが多い。同エミール・ゾラの友の文学会は1955年から文学研究誌『レ・カイエ・ナチュラリスト』(*Les Cahiers naturalistes : bulletin officiel de la Société littéraire des amis d'Émile Zola*) を発行し、今日にいたっている。

ものの少年時代からの友人であったポール・セザンヌの名を誰もが思い浮かべる。アナトール・フランスはいわゆる自然主義作家ではなく、ゾラが唱えた文学上の主張に与してすらいない。それでも「友人たち」の代表としてアナトール・フランスが登場するのは、ほかならぬこの「友人たち」が文学や芸術を通じてゾラが築いた交友関係による友人ではないことを示しているからだ。ドレフュス事件でゾラが正義と真実のために戦ったことを振り返り、「ゾラは冤罪を明らかにしていただけてはならず、フランスにおいて社会正義、共和主義思想、自由思想を束になって滅ぼそうとする暴力と抑圧のあらゆる力の共謀を告発していたのだ」と社会的なゾラの役割を強調して、「よりよい正義と万民の権利のより深い知識に基づく現況の新しい秩序がそこから生まれる」と人権同盟ならではの主張を繰り返したこのアナトール・フランスの弔辞からは<sup>11</sup>、「友人たち」が人権同盟のメンバーを指すことを理解できるのである。

また人権同盟のメンバーがゾラの別荘のあったメダンの地に集まり故人を追悼するようになったことも忘れてはならない。「巡礼」(le pèlerinage) と呼ばれて現在まで続くこの行事は1903年のゾラの死の1周年に初めて開かれ、ゾラ研究者のアラン・パジェス (Alain Pagès, 1950-) が研究書『ゾラとメダンのグループ』で述べたとおり「その大半は「われ弾劾す」の筆者に敬意を表してやってきたドレフュス派の活動家たちで、ピカール陸軍中佐、妻のルシに付き添われたアルフレッド・ドレフュスもそこにいた」のである<sup>12</sup>。

この人権同盟のメンバーは、ゾラの未亡人であるアレクサンドリーヌの協力を得て、ゾラの立像を作家の栄光と人権同盟の活動の顕彰のためにパリ市内に設置しようとしている。彫像は後述するさまざまな理由から1924年になるまでお蔵入りになっていたが、ここでは人権同盟がゾラ没後すぐに彫像制作の寄付を募った経緯を検討することで、人権同盟がゾラとの結びつきを重視しつつもゾラにかかわる活動はのちに結成されるエミール・ゾラの会<sup>13</sup>に移行させていったことを確認したい。

人権同盟はその活動を『会報』(*Bulletin officiel de la Ligue des droits de l'Homme*) に詳細に公表しているが、1901年の『会報』(出版は1902年) ではゾラと人権同盟主要メンバーとの往復書簡が掲載されるなど、必ずしも人権同盟の活動には積極的に関わらなかったゾラとの結びつきをアピールするものとなっている。ゾラの訃報は1902年10月1日付の『会報』に激震として報じられ、ゾラ未亡人への弔意に続いて早くもこのゾラの記念碑設置計画が立ちあがっている。ドレフュス事件におけるゾラの行動への賛辞が述べられたあと「栄えある作家であると同時に偉大な市民の姿を未来の世代の目に思い起こさせる記念碑をエミール・ゾラのために設置し、その提唱

の任を人権同盟が担うのはまったく自然なことと思われる<sup>14</sup>と述べて、寄付を募る呼びかけを行うのである。この寄付の呼びかけのあと、人権同盟創立メンバーの1人であるルドヴィック・トラリウ(Ludovic Trarieux, 1840-1904)の弔電、のちにエミール・ゾラの会の初代会長になるルイ・アヴェ(Louis Havet, 1849-1925)が共和派系新聞に宛てて出した公開書簡、やはり人権同盟設立メンバーの1人であるフランシス・ド・プレサンセ(Francis de Pressensé, 1853-1914)が『オロール』紙(*L'Aurore*)に出したゾラ哀悼の記事が続き、またゾラの葬儀の様子が描写されて、このゾラの葬列が人権同盟のメンバーで埋め尽くされていたことが報じられている。先述の3人の弔辞も全文が掲載され、最後に寄付金賛同者リストで締めくくられている。9月末日から10月2日までの3日間で法人・団体・個人を合わせて実に694件、総額10219フラン15サンチームが集まったのである<sup>15</sup>。また、ゾラの訃報の衝撃は全国に走り、10月15日付の号は人権同盟の地方支部からの弔辞で埋め尽くされている。寄付金総額も23925フラン25サンチームにのぼり<sup>16</sup>、短期間にどれだけ多くの賛同者がゾラ記念碑に善意を寄せたかが理解できる。

このゾラ記念碑設立委員会が人権同盟内にできたのは同年12月15日である<sup>17</sup>。投票で委員長にフランシス・ド・プレサンセが選出され、名誉委員長にルドヴィック・トラリウとアナトール・フランスが、副委員長には作家オクターヴ・ミルボー(Octave Mirbeau, 1848-1917)、前述の出版者ジョルジュ・シャルパンティエ、外科医のポール・ルクリュ(Paul Reclus, 1847-1914)が選ばれた。続いて選ばれた最初の実行委員会メンバーに「半分はエミール・ゾラの友人、残りの半分は人権同盟メンバー」の12人が選出されたことにも注意が必要だろう。ジャーナリストのジョルジュ・ブルドン(Georges Bourdon, 1868-1938)、音楽家アルフレッド・ブリュノ、政治家ジョルジュ・クレマンソー(Georges Clemenceau, 1841-1929)、版画家フェルナン・デムラン(Fernand Desmoulin, 1853-1914)、文筆家テオドル・デュレ(Théodore Duret, 1838-1927)、政治家イヴ・ギヨ(Yves Guyot, 1843-1928)、建築家フランツ・ジュールダン(Frantz Jourdain, 1847-1935)、物理技師でゾラ未亡人の名付け子であったアルベール・ラポルド(Albert Laborde, 1878-1968)、ドレフェュスの弁護士フェルナン・ラボリ(Fernand Labori, 1860-1917)、ピカール陸軍中佐(Marie-Georges Picquart, 1854-1914)、哲学史教授ガブリエル・セアイユ(Gabriel Séailles, 1852-1923)、『オロール』紙創設者のエルネスト・ヴォガン(Ernest Vaughan, 1841-1929)がこの当初の実行委員会のメンバーで、その後はメンバーの入れ替わりがあったとはいえ、ここにブリュノやデムランのような必ずしも人権同盟の活動に深くは関わらなかった本来の意味でのゾラの友人たちがいることは、

14 « Le Monument Émile Zola », in *Bulletin officiel de la Ligue des droits de l'Homme*, Ligue française pour la défense des droits de l'Homme et du Citoyen, année 1902, tome II, n° 18, 1<sup>er</sup> octobre 1902, p. 850. « Aussi lui [= à la Ligue des droits de l'Homme] semble-t-il qu'elle est tout naturellement désignée pour prendre l'initiative d'élever à Émile Zola un monument qui évoquera en même temps aux yeux des générations futures, l'écrivain illustre et le grand citoyen. »

15 « Monument Émile Zola. Liste de souscription. », *ibid.*, n° 18, 1<sup>er</sup> octobre 1902, pp. 871-880.

16 « Monument Émile Zola. Liste de souscription. », *ibid.*, n° 19, 15 octobre 1902, pp. 896-918.

17 « Le Monument Émile Zola. Comité. Séance du 15 décembre 1902 », *ibid.*, année 1903, tome III, n° 2, 1<sup>er</sup> février 1903, pp. 121-122.

18 « Le Monument Émile Zola. Commission exécutive. Séance du 9 février 1903 », *ibid.*, n° 3, 15 février 1903, p. 172.

19 ムニエに反対の異を唱えたのはあとで実行委員会に入った画家ジョルジュ・クレラン(Georges Clairin, 1843-1919)だった。「Le Monument Émile Zola. Commission exécutive. Séance du 6 avril 1903 », *ibid.*, n° 8, 1<sup>er</sup> mai 1903, pp. 507-508.

20 ムニエの制作のあとにも寄付を募り続けたために1906年末には80987フラン17サンチームにまで膨れあがっている。「Le Monument Émile Zola. Quarante-huitième liste de souscription. », *ibid.*, année 1907, tome VII, n° 1, 15 janvier 1907, p. 95.

21 たとえばパリ市の広場への設立反対意見が出ている市議会の様子を伝える以下の『会報』の記述を参考のこと。*Ibid.*, année 1908, tome VIII, n° 10, 31 mai 1908, p. 698. « En votant contre cette proposition, j'aurais exprimé le sentiment que la statue de l'auteur de « la Débâcle » et de « J'accuse » n'était pas digne d'être érigée sur une place publique de la ville de Paris. (Très bien ! à droite.) »

22 たとえばパリ近郊の町シュレンス(Suresnes)では1908年4月12日にゾラの胸像の除幕式が行われる予定であることを人権同盟『会報』は伝えている。この胸像はアナーキストで平和主義者の彫刻家エミール・デレ(Émile Derré, 1867-1938)の制作である。「Le buste d'Émile Zola », *ibid.*, n° 10, 31 mai 1908, p. 698.

23 Alain Pagès, « Les sanglots de Cézanne », *Impressionnisme et littérature*, sous la direction

彼らの意思が尊重されていたことを示しているのである。またのちのエミール・ゾラの会の設立時にもこのゾラの本来の友人たちを尊重する精神の反映が見られる。

ゾラの立像制作を彫刻家のコンスタンタン・ムニエ(Constantin Meunier, 1831-1905)に委ねることを決めたのは1903年2月9日の実行委員会であり、労働者をテーマとした画作で知られていたムニエを推薦したのはデュレだった<sup>18</sup>。ムニエはベルギー人であり、フランス人ではない彫刻家に制作を委ねる決定に異議がなかったわけではなかったが、ムニエも制作承諾をシャルパンティエを通して出している<sup>19</sup>。

寄付金は増え続けて<sup>20</sup>彫像は順調に仕上がったが、設立場所にパリ市が許可を出さないという事態が起こり、ゾラ記念碑設置はいわば宙に浮いた形になってしまう<sup>21</sup>。膠着状態のままこのゾラの記念碑設立を目的の1つとして1909年にエミール・ゾラの会ができることになるのである。この経緯から理解されることは、ゾラの突然の訃報に衝撃を受けた多くの有名無名の人物・団体が人権同盟の組織網を通じて善意を寄せ、それがゾラの記念碑制作のための多額の寄付金となったこと、またその一方でパリ市のような大きな自治体にはゾラだからこそ記念碑設立に許可を出さないという反ドレフュス・反ゾラの動きが歴然としてあったという事実である。そして、エミール・ゾラの会が設立されてその『会報』が作られることになったために、人権同盟の『会報』ではゾラに関わる記事はほとんど姿を消すことになるのである。

## 2 エクス・アン・プロヴァンスのゾラの胸像

ただ、すでに当時いくつかのゾラの胸像が地方に設置され始めていた<sup>22</sup>。なかでもゾラにゆかりの深いエクス＝アン＝プロヴァンスに置かれた2つのゾラの胸像について、ここではその経緯を検討する。

エクス＝アン＝プロヴァンスのメジャン(Méjanes)図書館で、1906年5月21日にゾラの胸像の除幕式は挙行された。これは前年の1905年に未亡人アレクサンドリーヌがエクス＝アン＝プロヴァンス市にゾラ全集と『三都市叢書』(*Les Trois villes*)の『ルルド』(*Lourdes*)、『ローマ』(*Rome*)、『パリ』(*Paris*)の草稿を寄付したことがきっかけだった。この寄贈に対して感謝のしるしに地方議会がゾラの胸像をメジャン図書館に置くことを決めたのである。この除幕式についてはアラン・パジェスが詳細な調査を行っており<sup>23</sup>、また当時報告書が作成されていることからその状況をよく知ることがで

きる<sup>24</sup>。この報告書には、式の状況が説明されているが、それによれば当時のエクス＝アン＝プロヴァンス市長であったジョセフ・カバソル (Joseph Cabassol, 1859-1928)、そしてゾラの旧友としてヌマ・コスト (Numa Coste, 1843-1907) が演説をしている。彫像を制作した彫刻家はこれもゾラの友人であったフィリップ・ソラリで、ソラリはこの式典に先立つ1906年1月20日に他界していたため、ソラリの息子でゾラが名付け親だったエミール・ソラリ (Émile Solari, 1873-1961) が式典に出席していた。

式典の出席者として報告書に名前が挙がっているのは、市長夫妻のほかにエクス大学区長、下院議員、上院議員、初等教育視学官といった地方の名士で、その中に画家としてセザンヌがいる。もちろんセザンヌは招待を受けてこの場にいるのであり、そのことは招待者席に彼が座っているという報告書の記述からも理解される。報告書の前書きの部分ではただ「画家セザンヌ」と記されているだけではあるものの、セザンヌがゾラの友人としてこの場にいたことは、市長カバソルが「いつも一緒にいたセザンヌ」(« l'inséparable Cézanne ») とセザンヌの名前を引いたり、コストが「3人組のバイユ、セザンヌ、そしてゾラ」(« trinité, Baille, Cézanne et Zola ») と述べていることから明らかである。また、『ユマニテ』紙 (*L'Humanité*) は「胸像はエクスの亡き彫刻家ソラリ氏のものによるものだ。彼の息子が除幕式にいて、ゾラの個人的なもう1人の友人である画家のセザンヌもいた。彼らは心からの熱い拍手を受けた。」とこの場の様子を伝えている<sup>25</sup>。アラン・パジェスは論考「セザンヌのすずり泣き」で、アレクサンドリーヌがもう1人のゾラの親友バイユ (Jean-Baptistin Baille, 1841-1918) にこの式典への出席を依頼した書簡を分析し、セザンヌにも同じような出席依頼をしていると解釈しているが、実際セザンヌはこの式典でゾラの親友としての立場を公にしているといえよう<sup>26</sup>。

「メジャン図書館におけるゾラの胸像の祝典はたいへん立派だった<sup>27</sup>」と伝えた新聞もあったように、この除幕式からはただセザンヌがゾラの友人であり、ゾラがエクス＝アン＝プロヴァンスで称賛されたことのみが伝わってくるが、セザンヌはまさにこのゾラの友人であると社会的に受け止められていることから、ドレフュスの擁護者であるゾラに周囲から結びつけられてしまう。よく知られているようにジョワシャン・ガスケ (Joachim Gasquet, 1873-1921) にセザンヌはゾラとの交流を喜んで話しているが、このゾラとの縁から、セザンヌはドレフュス派であるかのように文字通り迫害されてしまっている。アレックス・ダンチェフ (Alex Danchev, 1955-2016) が簡潔にまとめて紹介するように、アンリ・ロシュフォール (Henri Rochefort, 1831-1913) は『アントランジジャン』紙 (*L'Intransigeant*)

de Gérard Gengembre, Yvan Leclerc, Florence Naugrette, Presses universitaires de Rouen et du Havre, 2012, pp. 63-72.

24 (Numa Coste et Joseph Cabassol), *Compte-rendu de l'inauguration du buste d'Émile Zola à la Bibliothèque Méjanes*, Aix-en-Provence, Imprimerie, S, Bourély, 1906.

25 « Un buste de Zola. La cérémonie d'Aix. Les discours. », in *L'Humanité*, 3<sup>e</sup> année, n° 771, lundi 28 mai 1906, p. 2. « Le buste est dû au ciseau d'un défunt sculpteur aixois, M. Solari. Son fils est présent à l'inauguration, ainsi que le peintre Cézanne [sic.], autre ami personnel de Zola. Ils sont chaleureusement applaudis. »

26 パジェスはセザンヌがこの式典の中心にいたと理解している。Alain Pagès, « Les sanglots de Cézanne », *op.cit.*

27 L. P., « Le buste de Zola », in *Le Mémorial d'Aix, journal politique, artistique et littéraire*, 69<sup>e</sup> année, n° 44, dimanche 8 juin 1906, p. 2. « La fête d'inauguration du buste de Zola à la Bibliothèque Méjanes a été fort belle. »

28 アレックス・ダンチェフ『セザンヌ』(二見史郎、蜂巢泉、辻井忠男訳、みすず書房、2015年、305-306頁)。

29 ジョワシャン・ガスケ『セザンヌ』(與謝野文子訳、岩波文庫、2009年、189-190頁) / Joachim Gasquet, *Cézanne*, Encre Marine, 2002, pp. 210-211. « On fut, il faut l'avouer, particulièrement ignoble avec lui. Une coterie, à Aix, sans qu'on puisse en expliquer la cause, le haïssait à mort. Le mot n'est pas excessif. Un de ces lourdauds, un jour, ricana assez haut pour que je l'entende, comme Cézanne passait : « Au mur !... On fusille des peintres pareils. » [...] Un clérical soutenait que l'affaire Dreyfus était très explicable, puisque le gouvernement laissait circuler de tels énergumènes et tolérait qu'à Paris on exposât de telles infamies, tandis qu'un autre, radical notoire, expliquait à sa façon l'engouement de la capitale pour l'ami de Zola. »

30 同上、192頁/*Ibid.*, p. 213. « L'immonde article où Henri Rochefort, ignorant tout de l'art et de la vie de Cézanne, le traînait dans la boue comme ami de Zola, dreyfusard notoire autant que peintre malhonnête, parut. Trois cents exemplaires en furent commandés à l'*Intransigeant* et glissés la nuit sous la porte de tous ceux qui de près ou de loin pouvaient avoir manifesté quelque sympathie pour Cézanne. »

31 同上、195-196頁/*Ibid.*, p. 218. « Il avait beau, transfiguré un soir par l'admiration de quelques ouvriers, dans un cercle anarchiste, bondir vers un contradictoire et s'écrier, superbe : « - Vous savez bien qu'il n'y a qu'un peintre de

にセザンヌをゾラと結びつけてドレフュス事件の前からいたドレフュス派と決めつける悪意に満ちた記事を書いていた<sup>28</sup>。このような状況があったために、ガスケはその著書『セザンヌ』の中で、「ゾラの友人」としてのセザンヌをドレフュス事件と関連づけて「彼を殺したいばかりに嫌う一派がいた」と述べ、「教会派のある男が、ドレフュス事件なんかの説明がつかますよ、政府がこんな変な者を自由に横行させて、パリであんなひどい絵の展示を許すのだから、と主張するかと思うと、急進的思想で知られたほかの男は、ゾラの友人に首都がうつつをぬかしていることを彼なりに解説するのだった」と伝えている<sup>29</sup>。アンリ・ロッシュフォールについてガスケは「セザンヌの芸術のことも生活のことも一切無知なアンリ・ロッシュフォールが、ゾラの友人、皆も知るドレフュス派の人、そして不誠実な画家であるとして、彼をこきおろした不潔な記事が出た。すると『アントランジジャン』紙が300部注文され、夜なかのうちに、セザンヌに対して多少でも親近感を示したところのある人たちの玄関にそっと置かれた。」と述べる一方で<sup>30</sup>、「ある晩、アナキストのサークルで、数人の労働者の敬意を受けて変貌してしまったセザンヌ<sup>31</sup>」とか「労働者における連帯という考えが好きだった<sup>32</sup>」という証言をする。ガスケの証言がどこまで正しいかは別にして、ガスケ自身が感じていたことは、セザンヌが周囲からドレフュス派であるかのように理解されることがあったということなのである。

このようなセザンヌの理解はガスケだけのものではない。セザンヌの没後、1921年にマルセイユにゾラの名を冠する通りができたときに、人権同盟がマルセイユの市議会に、セザンヌの名のついた通りと、人権同盟の会長であったフランシス・ド・プレサンセの名のついた通りをつくり、この3つの名を結びつけるように提案したのである。

小説家エミール・ゾラの名前と画家セザンヌの名とフランシス・ド・プレサンセの名を結びつけるように、人権同盟は市議会に依頼するものである。フランシス・ド・プレサンセは、国会議員で人権市民権同盟を率いていた。同士フラシエールがここに我々が謝意を受けられんことを。そして、エミール・ゾラ、ポール・セザンヌ、フランシス・ド・プレサンセの3人の名をわれらが美しい街の大道につけられて目にするという喜びを我々はじきに得られんことを。<sup>33</sup>

この『ル・プチ・プロヴァンサル』紙 (*Le Petit Provençal*) の記事は、1922年のエミール・ゾラの友の文学会の『会報』にも掲載されており、これもセザンヌの意向と無関係に画家とゾラとが政治的に結びつけ

られてしまうことがあったことを示している。

一方で、ゾラがドレフュス擁護者として理解されたために大きな騒動を引き起こしたのは、この1つ目の胸像の時ではなく、2つ目のエクス=アン=プロヴァンスの胸像除幕式の時だった。上述のエミール・ゾラの友の文学会の前身であるエミール・ゾラの会の1910年の『会報』にはその胸像制作の経緯を詳らかにする記事があるが、その記事ではエクス=アン=プロヴァンスにおいてゾラが培ったソラリーやバイユヤセザンヌとの友情があらためて紹介されるとともに、1906年に胸像が設立されたメジャン図書館よりもっと公的な場である町の広場に記念碑を設立されるために委員会が設立基金を集めたことも伝えられている。

この委員会は基金を集め、それは4000フランを少し超えるもので、エミール・ゾラの旧友のエクス=アン=プロヴァンスの彫刻家フィリップ・ソラリーにこのモニュメントを注文した。彼は時系列で述べると1867年にとても美しく極めて力強いモンマルトル墓地にあるエミール・ゾラの胸像を作り、1905年にはメジャンに置かれた胸像を作った。3つ目の作品が制作され委員会が受けとっている。しかし、この作品は胸像だけで台座が考えられていなかったのだが、それは作業まっただなかの芸術家を突然の死が襲ったからであった。<sup>34</sup>

すでにできあがっていたにもかかわらず胸像が設置されていなかったのはどの広場に置くかが決まっていなかったからであるが、これもバリの彫像設立時の問題と同じく、ドレフュス派も反ドレフュス派も通る広場にゾラの胸像を設置することは政治的な立場表明の意味からも治安の面からも市にとってたいへんな決断を迫られることだったからなのである。

実は1908年にエクス=アン=プロヴァンスでは市長が共和派の政治家であるモーリス・ベルトラン(Maurice Bertrand, ? - ?)になっていたが、共和派であるにもかかわらずベルトランはゾラの胸像設置には消極的だった。のちにエクス=アン=プロヴァンス市はこのゾラの胸像をガネ広場(place Ganay)に設置することを決めて1911年11月12日に除幕式を挙行するが、これについてメジャン図書館にはタイプ浄書されたジョセフ・コスト(Joseph Coste, 1872? -1957)という小学校名誉校長が1953年<sup>35</sup>に書いた回想文書が残っており、市長ベルトランの消極的な態度と胸像設置の経緯、そして除幕式の様子が伝えられている。コストは、除幕式の朝になって市長のベルトランが来ず、代わりに市参事が登場し、設立委員会と共和党から非難されるという事態を伝えているが、コスト自身は数日

vivant, moi ! »

32 同上、187頁/*Ibid.*, p. 208.  
« Il aimait cette idée de la solidarité dans le labeur. »

33 *Le Petit Provençal*, 12 novembre 1921, l'article repris dans le *Bulletin de la Société des amis d'Émile Zola*, 1922, pp. 37-38. « La Ligue des droits de l'Homme (section de Marseille) appelle l'attention du Conseil municipal sur l'acte de haute équité qu'accomplirait la ville de Marseille en donnant à l'une de ses voies publiques le grand nom d'Émile Zola. [...] Enfin, la Ligue des Droits de l'Homme demande au Conseil municipal de vouloir bien associer aux noms [sic.] du romancier Émile Zola et du peintre Cézanne, le nom de Francis de Pressensé, qui fut au Parlement et à la tête de la Ligue des Droits de l'Homme un des citoyens qui ont le plus honoré la République. [...] Que le citoyen Flassières trouve ici l'expression de notre gratitude, et que la joie nous soit donnée bientôt de voir ces trois noms : Émile Zola, Paul Cézanne, Francis de Pressensé, attachés à trois grandes voies de notre belle cité. »

34 « Zola et la ville d'Aix en Provence », in *Bulletin de l'Association Émile Zola*, n° 1, 1910, p. 39. « Ce fut au cours de ses premières années qu'Émile Zola fit la connaissance à l'école et durant ses jeux de Philippe Solari, de Baille et de Paul Césanne [sic.], qui restèrent ses compagnons d'adolescence et de jeunesse. [...] Ce Comité réunit des fonds - un peu plus de quatre mille francs - et commanda ce monument au vieil ami d'Émile Zola, le sculpteur

aixois Philippe Solrai, auteur, par ordre de date, en 1867, du très beau et très vigoureux buste d'Émile Zola qui est au cimetière Montmartre et, en 1905, du buste placé à la Méjanes. Une troisième œuvre fut exécutée et reçue par le Comité. Mais elle consistait en un buste seul, le piédestal n'était pas conçu, la mort ayant brutalement surpris l'artiste en plein travail. »

35 この胸像は現在ジョルダン公園 (Parc Jourdan) に設置されているが、1953年はこの胸像が移転された年で、ジョセフ・コストはその移転を機に回想を書いたとしている。

36 Joseph Coste, *Histoire de l'érection du monument Émile Zola en 1911*, document dactylographié, 6 feuilles, 1911, 3<sup>e</sup> et 4<sup>e</sup> feuilles (conservé à la Bibliothèque Méjanes d'Aix-en-Provence sous la cote Ln 4 pcs 1305). « Nous vîmes arriver un brave homme de conseiller municipal qui me demande quel serait son rôle dans la cérémonie. Sur une table du café je fus obligé de griffonner quelques lignes à la hâte qui constituaient la prise de possession par la ville. Cette attitude du maire et de la municipalité fut sévèrement jugée par le comité et le parti républicain. Elle ne me surprit pas. En effet, quelques jours avant j'avais eu une longue controverse avec le docteur MAURICE BERTRAND. Il m'avait déclaré qu'il n'aimait pas Zola, [...] celui-ci avait diminué la France. »

37 « La Ville d'Aix-en-Provence inaugure un monument à Zola, le 12 novembre 1911 », in *Bulletin de l'Association Émile Zola*,

前にベルトラン市長と話をして市長がフランスを貶めたゾラを好まないということを直接本人から聞いていたため、この事態の展開に驚かなかったと述べる<sup>36</sup>。この除幕式については、1911年のエミール・ゾラの会の『会報』第5号にも詳しい記事が掲載されているが、実際市長の代わりにアベル・ドマ (Abel Daumas, ?-?) という市参事がいることが記録されている。この『会報』の記録からはゾラ未亡人アレクサンドリーヌやのちにゾラの娘ドニーズ (Denise Le Blond-Zola, 1889-1942) の夫になるモーリス・ル・ブラン (Maurice Le Blond, 1877-1944) が出席していたこともわかる。また、出席者の中に高等学校教員ブランシャール (Blanchard, ?-?) という人物がいるが、このブランシャールは人権同盟のエクス=アン=プロヴァンス支部の当時の会計担当であった。

1911年のこの除幕式には、ドレフュス事件を契機として結成されたフランスの王党派組織であるアクション・フランセーズ (Action Française) の行動部隊であったカムロ・デュ・ロア (Camelots du roi) が来て、大騒動になっている。

幕がとられると、[中略]チエール通りとトゥルヌフォール通りに集まっていたカムロの小集団が、これもまたアクション・フランセーズが彼らに持たせたおもちゃを見せたくてうずうずしていたのだが、ここぞとばかりに道具を取り出したのである。[中略]呼子が吹き鳴らされ、悪意ある叫び声があがるが、力強い数多くの拍手がそれに応じる。[中略]それまでは拍手するだけにとどまっていた観客は若い王党派たちがやりたいようにさせることをもはや許さず、彼らは攻撃を激しく押し返したのである。[中略]こづいたり、杖でうったりして、何人かの警官が押されて軽いけがをした。[中略]我がちに逃げ出したが12人ほどの逮捕者が出た。<sup>37</sup>

上述のコストは、この除幕式のあとも長い間、ゾラの胸像の台座にごみが捨てられ、インクツボが石柱に投げつけられていたことを伝えている<sup>38</sup>。一方でこの式典で式辞を読んだエクス=アン=プロヴァンス大学区長ジュール・ペイオ (Jules Payot, 1859-1940) のスピーチもゾラをドレフュス事件ととりわけ関連づけて、「ゾラの英雄的な行動は国家にとって栄光ある行動であり範を垂れるものだった<sup>39</sup>」と訴えた。

このようにドレフュス事件と結びつけられた事件であったガネ広場でのゾラの胸像除幕式ではあったものの、ここで忘れてはならないのは式典やそのあとの祝宴で作家としてのゾラを称えるスピーチも多くあったことだ。劇作家協会の副会長のピエール・ドゥクルセ

ル(Pierre Decourcelle, 1856-1926)、文筆家協会代表のポール・ブリュラ(Paul Brulat, 1866-1940)、メジヤン図書館司書のエドゥアール・オード(Édouard Aude, 1868-1941)は作家としてのゾラの大切さをそれぞれスピーチで語っている。ゾラを愛して集まったこの人々にとって、当然ながらゾラが作家として記憶されていることも確認できた機会だったのである。

さて、このエミール・ゾラの友の文学会の『会報』で、ジョワシャン・ガスケの訃報がもう1人のエミール・ゾラの友の文学会の重要な人物であるポール＝イヤサント・ロワゾン(Paul-Hyacinthe Loyson, 1873-1921)と結びつけられていることにも注目すべきである。劇作家として知られるポール＝イヤサント・ロワゾンは1909年のエミール・ゾラの会の創設者の1人であったが、それはなによりも人権同盟のつながりゆえであった。

この2人の訃報は次のような紹介から始まる。「エミール・ゾラの友の文学会は2人の創設者メンバーを失うという、ほとんど癒されない辛い思いでいる。それはポール＝イヤサント・ロワゾンとジョワシャン・ガスケである。重なる大きな不幸がフランス文学を襲い、われらが友人たちにひどく苦しく感じられているのである。<sup>40</sup>」2人の死がフランス文学にとって大きな損失であることがまず述べられるが、当然ながら人権同盟の活動との結びつきがこの記事の主題である。ポール＝イヤサント・ロワゾンについては、「1911年、彼はこの肩書で隔週の定期刊行物であった『人権同盟』を創設していた。その無償で献身的な運動ぶりを誰も忘れない。[中略]エミール・ゾラの会の書記長であったポール＝イヤサント・ロワゾンは1909年から1913年までメダンの巡礼の企画者であり運営担当であった。師の思い出に身を捧げ、師をライック(非宗教)の「聖人」として称えていた。その崇拜はもっとも誠実なもの、もっとも影響力のあるものだった。<sup>41</sup>」と記事は続ける。一方でガスケについては、とりわけドレフュス事件に際してゾラの英雄的行為と才能を讃えた詩人として紹介され、またメダンの巡礼でゾラを偲ぶ詩がガスケによって作られる予定もあったということが述べられている<sup>42</sup>。

この訃報から理解されることは、人権同盟と深くつながっていたエミール・ゾラの会およびエミール・ゾラの友の文学会とガスケは結びつきがあったという事実であり、またこの訃報がドレフュス事件のゾラとガスケの結びつきを強調しているということである。エミール・ゾラの友の文学会という集団の記憶として、ガスケはドレフュス擁護という価値観をあたかも共有する人物のように描かれているのである。

n° 5, 1911, pp. 180-181. « Mais, dès que le voile fut tombé, [...] l'escouade des camelots, concentrée dans les rues Thiers et Tournefort, impatiente de dévoiler, elle aussi, à tous les jouets dont l'Action Française les avait nantis, crut devoir sortir ses instruments. [...] Des coups de sifflets et des cris hostiles retentissent, auxquels répondent de vigoureux et nombreux applaudissements [...]. Les spectateurs qui, jusqu'à ce moment, s'étaient contentés d'applaudir en réponse aux cris de la camelote, ne permirent point aux jeunes royalistes d'abuser de leurs droits au point de méconnaître ceux des voisins et d'avoir la prétention de leur imposer leur volonté. [...] Des coups de poing et de canne furent échangés, quelques agents furent bousculés et légèrement blessés. [...] Ce fut une débandade au cours de laquelle une douzaine d'arrestations furent opérées. »

38 Joseph Coste, *op. cit.*, 4<sup>e</sup> feuille. « Pendant longtemps des ordures furent jetées sur le socle et des encriers sur la stèle. »

39 « La Ville d'Aix-en-Provence inaugure un monument à Zola, le 12 novembre 1911 », *op.cit.*, pp. 178-179. « Lorsque, le 13 janvier 1898, Zola publia dans l'*Aurore* sa lettre au Président de la République, immédiatement répandue dans le pays à trois cent mille exemplaires, Zola était riche, glorieux. Il n'avait, pour continuer à récolter d'une vie de vaillant travail, qu'à s'abstenir dans la lutte qui coalisait les forces d'oppression contre la justice et la pensée libre. [...] Mais, dès qu'il fut certain que les formes de la justice avaient été

ciblées contre un accusé, il fit le sacrifice de sa tranquillité, de son bonheur et de celui des siens et il écrivit ses « J'accuse », tant était claire en lui la vérité fondamentale, [...]. Aux yeux des générations qui nous suivront et qui, ayant oublié les détails de nos luttes actuelles n'en verront que les grands résultats, l'acte héroïque d'Émile Zola sera, pour la Nation, un acte glorieux et un grand exemple. »

40 « Nécrologie, Paul Hyacinthe-Loyson. - Joachim Gasquet », in *Bulletin de la Société des Amis d'Émile Zola*, 1922, p. 35. « La Société littéraire des Amis d'Émile Zola a eu la douleur de perdre, à peine constituée, deux de ses membres fondateurs, Paul Hyacinthe-Loyson et Joachim Gasquet. C'est là un double deuil qui frappe la littérature française et qui a été vivement ressenti par nos amis. »

41 *Ibid.*, p. 36. « En 1911, il avait fondé, sous ce titre, *Les Droits de l'Homme*, un journal hebdomadaire, dont on n'a pas oublié les campagnes désintéressées et généreuses. [...] Secrétaire général de l'Association Émile Zola, P. H.-Loyson fut, de 1909 à 1913, l'organisateur et l'animateur des Pèlerinages de Médan. Il avait voué à la mémoire du maître, qu'il honorait ainsi qu'un « saint » laïque, le culte le plus sincère et le plus agissant. »

42 *Ibid.*, p. 36. « Joachim Gasquet, dont les tendances étaient plutôt « royalistes » et qui s'était soumis aux disciplines de M. Maurras, resta toujours un zoliste fervent. Le poète de *Dyonisos*, du *Bücher*

### 3 パリの彫像：『四福音書叢書』の作者としてのゾラ

さて、ポール＝イヤサント・ロワズンがゾラを「ライック（非宗教）」とはいえ「聖人」と見なしていたという上述の1922年のエミール・ゾラの友の文学会の『会報』は、神聖視にも似たゾラ崇拜がこの時期にあったことをよく示している。メダンの「巡礼」という表現もその表れであるが、人権同盟はライックな団体として宗教とは無関係であるものの、ゾラの彫像を人権活動家のアイコンのような位置づけとし、あたかも一種の崇拜の対象であるかのように語るのである。ここでは、パリの彫像設置をめぐる騒動の逸話を検討し、また当時ゾラを題材として出版された書物がとりわけ社会活動家にして『四福音書叢書』の作家としてのゾラを称賛していること、さらにそのような語り口が1924年のパリでのゾラ記念碑除幕式の人権同盟関係者のスピーチと一致することを確認したい。

パリにゾラの彫像を設置する任務を担ったのは先述のとおり1909年に発足したエミール・ゾラの会だった。『会報』第1号に議事の模様が掲載されたが、1909年6月3日の最初の会合の議題はまさにゾラの彫像の設置であり、実現のために会長に就任したルイ・アヴェエが国民教育省に働きかけることを伝えている<sup>43</sup>。『会報』第2号もムニエの制作したゾラ立像の写真を冒頭に掲載し、また「エミール・ゾラ記念碑」と題する記事では「偉大な彫刻家コンスタンタン・ムニエの素晴らしい作品は、まもなくパリに設置され、その日にはわれわれは10万となって集結し、政府首脳を歓呼して迎えるだろう。働くパリ、思索するパリを賛美して比類なき詩情が紙面にあふれる作品をものにした作家のアポテオシスに首相は参列するのだ。」と気炎を上げている<sup>44</sup>。このアポテオシス（apothéose）とは、公的栄誉の意味であるが、同時に古代ローマで死者を神々の列に加えるいわば列聖のことであった。このように1908年にパンテオン入りしたゾラを神聖化するかのような崇拜言説がゾラの彫像に用いられるようになったのである。

パリ市の非協力的な対応ゆえに袋小路に入ってしまったゾラの彫像設置計画だったが、1913年にはこの計画を推進してきたエミール・ゾラの会に2つの重大事件が起こる。その1つは会の分裂だった。中心メンバーのモーリス・ル・ブロンとアルフレッド・ブリュノが対立し、2人が退会するという事件が起こるのである<sup>45</sup>。主要メンバーの一部を失ってもなおゾラ彫像の設置を目指すエミール・ゾラの会に、今度は肝心のゾラの立像が行方不明になるという2つ目の事件が起こる。同年『会報』第9号に掲載された「いかにしてゾラは復活したか」に紛失から発見までの経緯が詳らかにされている<sup>46</sup>。

ムニエが制作した立像はグラン・パレの地下倉庫に保管されてい

ることになっていた。ただ、運搬は業者が行ったためにそれを実際に確認した者はいなかった。事の発端はライック青少年連盟の代表団が敬意を表すべくゾラの彫像を見に行くことを希望したことにあった。代表団が「復活するゾラのために、フランス・ライック青少年団」と記された棕櫚の葉を持参してグラン・パレに到着したところ<sup>47</sup>、グラン・パレ側はゾラの像はそこにはないことを告げたのである。仕方なく代表団はパンテオンのゾラの墓にこの棕櫚の葉を捧げたのだが、棕櫚は殉教者を示すものであり、カトリックの枝の主日といわれる復活祭直前の日曜日の祝祭に用いられるものであることが、社会正義を訴える活動のさなかで命を落としたゾラへの崇拜の念を如実に示している<sup>48</sup>。

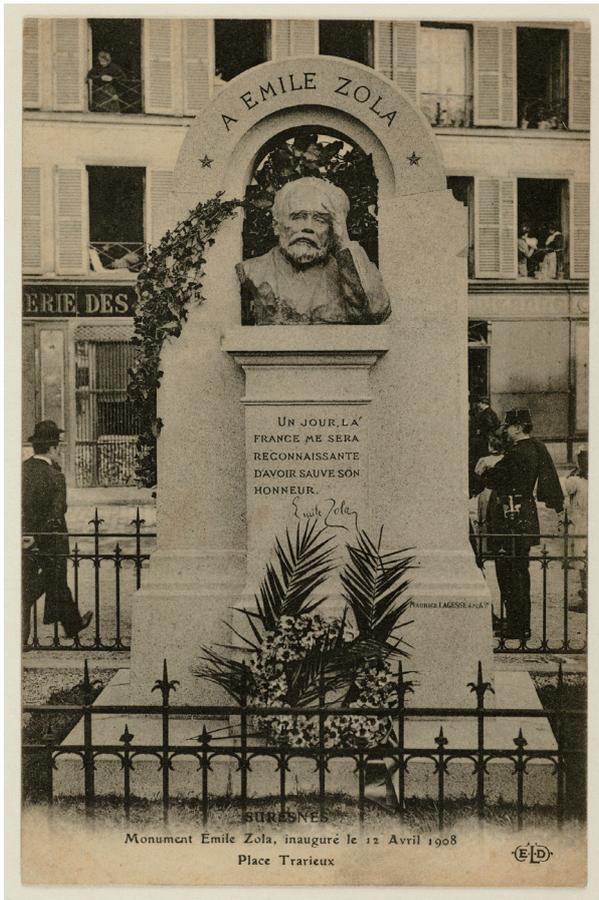


図1 絵葉書「シュレンヌ、エミール・ゾラの記念碑、1908年4月12日落成、トラリウ広場」(« SURESNES / Monument Émile Zola, inauguré le 12 Avril 1908 / Place Trarieux »)、ブルターニュ美術館/パンティネ・エコミュージアム(Musée de Bretagne et de l'écomusée de la Bintinais)蔵 © Musée de Bretagne et de l'écomusée de la Bintinais

secret, et des Hymnes, avait été l'un des premiers à applaudir à la fondation de la Société des Amis de Zola. Son admiration pour l'auteur des *Rougon-Macquart* était ancienne. En janvier 1898, alors qu'on traînait en cour d'assises l'auteur de : J'accuse, Gasquet consacrait à glorifier l'héroïsme et le génie d'Émile Zola un numéro de ses *Mois Dorés*, qu'il publiait à Aix-en-Provence. Dans son livre sur Cézanne, où il venge le fier artiste des misérables commentaires du burlesque Vollard, Gasquet a rétabli sous la lumière vraie l'amitié d'enfance qui unissait les deux grands hommes. Ce sujet lui était si cher que, au moment de sa mort, Gasquet pensait à en composer un poème, qui devait être lu au dernier pèlerinage de Médan. La guerre, loin d'affaiblir l'admiration que le poète des *Hymnes* avait pour Zola, n'avait fait que l'exalter. »

43 « Réunion du comité », in *Bulletin de l'Association Émile Zola*, n° 1, 1910, p. 5.

44 « Le Monument d'Émile Zola », in *Bulletin de l'Association Émile Zola*, n° 2, 1910, p. 70. « L'œuvre admirable du grand statuaire Constantin Meunier sera d'ici peu inaugurée à Paris, et, ce jour-là, nous serons cent mille hommes pour acclamer le chef du Gouvernement qui viendra participer à l'apothéose de l'écrivain, dont l'œuvre même contient, à la gloire de Paris qui travaille et de Paris qui pense, tant de pages d'un lyrisme incomparable. »

45 この事件の詳細は以下の論考を参考のこと。寺田寅彦「ゾラの歿後十年と日本近代文学」(前掲書、71-73頁)。またエミール・

ゾラの会の『会報』第8号も参考になる。なお、『会報』第8号は2号出ており、フランス国立図書館のGallicaで公開されている第8号は2021年6月20日時点でル・ブランが関わった1つ目のもののみである。会の分裂についてはGallicaに公開されていない緑の表紙の2つ目の第8号を見る必要がある。なおマイクロフィルムにもこの号は複製されていない。Paul Brulat, « Simple exposé », in *Bulletin de l'Association Émile Zola*, n° 8 (le deuxième), 1913, pp. 1-3.

46 « Comment Émile Zola ressuscita », in *Bulletin de l'Association Émile Zola*, n° 9, 1913, pp. 19-26. この第9号も2021年6月20日時点でGallicaに公開されていない。

47 *Ibid.*, p. 19. « Cette délégation apportait une palme avec la devise : « À Émile Zola, qui ressuscitera. Les Jeunesses laïques de France ».

48 シュレンヌに設置されたゾラの胸像の写真にも棕櫚の葉が捧げられていることが確認できる(図1)。

49 *Ibid.*, p. 20. « Émile Zola, tu ressusciteras. »

50 *Ibid.*, p. 24. « Les délégués, au nombre d'une cinquantaine, s'étant assemblés devant la statue, le secrétaire général du congrès cloua, lui-même, sur la muraille, la palme de la Fédération portant cette inscription, que la direction des beaux-arts avait préalablement acceptée : « À Émile Zola, prisonnier, les Jeunesses laïques de France ». [...] Puis, le secrétaire général de la Fédération, Georges Boucoiran, prononça, visiblement ému, l'allocution suivante : « J'éprouve quelque fierté à venir aujourd'hui,

「エミール・ゾラよ、お前は復活するだろう<sup>49</sup>」という言葉を胸にエミール・ゾラの会は彫像の搜索を始めるが、グラン・パレ、パリ市遺失物取扱所、公営物置場とたらいまわしにされてしまう。結局またグラン・パレの地下倉庫に戻ることにしたが、そこで警備員の1人が以前どこかで彫像のようなものを見たことを思い出す。翌日、ゾラの彫像は無事に発見され、それはフランシス・ド・プレサンセが彫像と明記せずに委託をしてしまったために、本来彫像が置かれる位置に保管記録もなく置かれてしまっていたのが原因だったと判明したのだった。

文字通り三面記事的なこの「再発見」のあと、人権同盟のメンバーとライック青少年連盟代表団の50人が集って再びグラン・パレの地下倉庫にゾラの彫像を見に行くということになった。今度は「囚われの人、エミール・ゾラ、フランス・ライック青少年団」と書かれた棕櫚の葉を捧げて「今日、あなたの名において、崇拜する師、エミール・ゾラに、ライック青少年連盟の感謝の務めを果たしにここにきたことを少なからず誇りに思います」と感動に声を震わせながら演説を行ったのだった<sup>50</sup>。これに応じてポール・イヤサント＝ロワゾンがエミール・ゾラの会を代表して、ゾラの彫像をラザロの復活の奇跡と同じくパリ市内に復活させることを誓ったのである<sup>51</sup>。

英雄崇拜の言説がそのレトリックゆえにしばしば神聖化の様相を帯びることは容易に理解されるが、この事件を語る筆の端々にゾラをキリスト教殉教者の姿にやささか安易になぞらえようとする意図を読み取ることは難しくない。このような背景を考えると、当時はゾラを『ルーゴン・マッカール叢書』(*Les Rougon-Macquart*)の作家として理解するよりもとりわけ『四福音書叢書』の作家として理解しようとする本が多くあったことにも納得がいく。マフェオ＝シャルル・ポワソ(Maffeo-Charles Poinso, 1872-1954)の『社会文学』が1907年にこの『四福音書叢書』の『労働』(*Travail*)を取りあげて、「『労働』が、人類を平和と労働から友愛へと導くエネルギーの賞賛でなくてなんだろうか」と書いたり<sup>52</sup>、あるいはアレクサンドル・バイヨ(Alexandre Baillot, 1884-1981)がちょうどゾラの記念碑がパリに設立された1924年に出版した『エミール・ゾラ、人、思想家、批評家』において「ゾラの作品は社会の混沌の中で輝く灯台のように若い世代を平和と幸せに導くのだ。生きる喜びと正義の希望が躍動するような作品は、本質的に道徳的ではないというにはあまりに人間的であまりに真摯なのだ。」と書いたことなどからも<sup>53</sup>、ゾラの後期の作品の社会的役割がとりわけこの時代に強調されていたことが理解されるが、その社会的なゾラの役割を「新しい宗教」と呼んだ1人がポール・ブリュアで、若者世代にあててブリュアが書いた『エミール・ゾラの大衆向け物語』の中で「ゾラの晩年期の本で

彼は新しい宗教、真の現代版福音書をしたためようとする強い気持ちを持っていたのである」と書いたのだった<sup>54</sup>。

ゾラの社会的貢献とそれゆえの崇拜の念が、ようやく実現したゾラ彫像の除幕式で人権同盟の演説の中に数多く見られても不思議ではない。この式典の演説は、人権同盟の『会報』に全文掲載されたが、まずゾラ記念碑委員会委員長のマチアス・モラルト (Mathias Morhardt, 1863-1939)、続いてパリ市議会議長のジョルジュ・ラル (Georges Lalou, 1862-1951)、セーヌ県議会議長のフレデリック・ブリュネ (Frédéric Brunet, 1868-1932)、グルネル区議会議員ブソンベ (Besombes, ? - ?)、文筆家協会会長のジョルジュ・ルコント (Georges Lecomte, 1867-1958)、劇作家協会会長のアンドレ・メサジェ (André Messager, 1853-1929)、タルヌ県代議員ジョセフ・ポール＝ボンクール (Joseph Paul-Boncour, 1873-1972)、国民教育省大臣フランソワ・アルベール (François Albert, 1877-1933)、フランス労働総同盟総務レオン・ジュオ (Léon Jouhaux, 1879-1954)、フリーメイソンのフランス大東社代表アンドレ・ルベ (André Lebey, 1877-1938)、スペイン人作家のビセンテ・ブラスコ・イバニェス (Vicente Blasco Ibáñez, 1867-1928)、フリーメイソンのフランス・グランドロッジ代表ル・フォワイエ (Le Foyer, ? - ?)、教員組合総務のルーセル (Roussel, ? - ?)、ライック青少年連盟会長ガストン・ボノール (Gaston Bonnaure, 1886-1942)、首相エドゥアール・エリオ (Édouard Herriot, 1872-1957)、人権同盟会長フェルディナン・ビュイソン (Ferdinand Buisson, 1841-1932)、そして最後にポール・ブリュラが締めくくったのだった<sup>55</sup>。

これらの演説の中でいわゆるゾラの文学的な業績を回顧したのはルコントとメサンジェぐらいだった。ルコントはユゴーやバルザックとの比較からゾラの文学的特徴を述べ、またメサンジェは『テレーズ・ラカン』(Thérèse Raquin)をはじめとするゾラの戯曲作品について演説を行った。だが他の登壇者がとりわけ口にしたゾラの作品は炭鉱ストライキを扱った『ジェルミナル』(Germinal)、農家を描いた『大地』(La Terre)、そしてなによりも『四福音書叢書』の『労働』と『真理』(Vérité)だった。パリ市議会議長だったラルが『三都市叢書』の『パリ』を取りあげたのは例外的だったが、そこにラルは巨大な都市が未来に向けて飛び立つメシア思想的なヴィジョンとゾラを読み取り、やはり社会的な関心からゾラの作品を扱っているといえる。グルネル区の区議会議員ブソンベはプロレタリアにとってのゾラが自分たちとともにあることを述べている<sup>56</sup>。そして、その社会的なメッセージをなによりもよく表していたのは、ほかならぬゾラの彫像だった。この彫像には子供たちに囲まれた女性像があり、これは『四福音書叢書』の『豊穡』(Fécondité)を表している<sup>57</sup>。ま

en votre nom, apporter au maître vénéré, à Émile Zola, le tribut de reconnaissance de la Fédération des Jeunesses laïques. [...] »

51 *Ibid.*, p. 24. « Nous sommes aujourd'hui assez humiliés devant le monde d'avoir à descendre sous terre pour y chercher une gloire nationale, ce sera l'honneur des J. L. [= Jeunesses laïques] d'avoir, les premiers, entr'ouvert le tombeau de Lazare : à bientôt la résurrection au grand jour de la capitale. »

52 Maffeo-Charles Poinsot, *Littérature sociale*, Bibliothèque générale d'édition, 1907, pp. 140-141. « Qu'est-ce que Travail, sinon la glorification de l'Énergie, qui mènera l'Humanité, par la paix et le labeur, à la fraternité ? »

53 Alexandre Baillet, *Émile Zola, l'homme, le penseur, le critique*, Société française d'imprimerie et de librairie, 1924, p. 188. « L'œuvre de Zola apparaît dans le chaos social comme un phare lumineux guidant les jeunes générations vers la paix et le bonheur. Une telle œuvre où palpité [sic.] la joie de vivre et l'espoir de la justice est trop humaine et trop sincère pour ne pas être essentiellement morale. »

54 Paul Brulat, *Histoire populaire d'Émile Zola*, La Librairie mondiale, 1909, p. 65. « [...] dans les derniers livres de Zola, par lesquels il eut l'ambition de formuler une religion nouvelle, un véritable Évangile moderne. »

55 « Numéro spécial. En l'honneur d'Émile Zola », in *Les Cahiers des droits de l'Homme*,

25 juin 1924, n° 13, pp. 291-313.

56 *Ibid.*, p. 297. « Le prolétariat ne s'y trompa point et reconnut aussitôt Zola comme l'un des siens. »

57 アルフレッド・ブリエノは「生命」を表すとしている。  
Alfred Bruneau, *À l'ombre d'un grand cœur*, Slatkine, 1980, p.210.

た、労働者の像もあり、これは『労働』である。ゾラ自身は前を向き、着実に歩みを進めているかのように見え、ドレフュス事件でゾラが唱えた「真実は前進する」(« La vérité en marche »)を体現しているといえる(図2)。この記念碑のゾラは『ルーゴン・マッカール叢書』のゾラでも、自然主義作家のゾラでもない。ドレフュス事件で真実を求めたゾラ、『四福音書叢書』で民衆の未来を描いたゾラなのである。



図2 絵葉書「パリ15区、エミール・ゾラの彫像、エミール・ゾラ大通り」(« Paris (XV<sup>e</sup>) - Statue d'Émile Zola, Avenue Émile Zola »)、個人蔵 (Collection J.-S. Macke) © Archiz

## 結論にかえて

今日の文学研究の対象としてのゾラの作品はなによりも『ルーゴン・マッカール叢書』であり、そして『テレーズ・ラカン』などを代表作とするゾラの若い時代の作品と短編小説であるといえる。その傾向はプレイヤード叢書がまさにこの『ルーゴン・マッカール叢書』と短編・中編小説のみを取りあげていることから明確に理解される。だが、ゾラをドレフュス事件から理解し、『四福音書叢書』からゾラの世界に入る時代がたしかにあったのだ。

そのようなゾラ理解は思わぬ影響をゾラの周囲に与えることもあり、人権同盟といういわば文学や芸術活動とは無縁の団体の活動ゆえに、セザンヌやガスケがゾラとのつながりからドレフュス派に結びつけられてひとつの集団的な記憶のなかに残ったこともあった。実際にはセザンヌ自身はドレフュス事件とは距離をとっていたものの、エクス＝アン＝プロヴァンスの1906年の除幕式が示すように、セザンヌはドレフュス擁護者ゾラの友人としてひろく人々に認識されていたのである。そしてそれは、メダンの館で行われる巡礼と、その巡礼の様子を伝える『会報』により生まれた記憶の場でもあるのだ。

もちろんこの記憶の場は文学の記憶の場であることも忘れてはならない。『ユーロップ』誌は1952年にもゾラ特集号を出しているが、そこには当時のエミール・ゾラの友の文学会の会長としてゾラ研究を牽引していた作家ピエール・パラフ(Pierre Paraf, 1893-1989)が「エミール・ゾラ、詩人」と題する論考を寄せている。そしてそれは、『ルーゴン・マッカール叢書』から『四福音書叢書』までのゾラの作品に前向きな詩心を見出そうとする試みだった。

『豊饒』、『労働』、『真理』、『正義』、これらは詩人の小説だ。そしてとりわけ『労働』では、ボクレールの小さな都市で、1人の技師の男と1人の労働者の女の愛を通じて、そのままユートピアとイカリの国に入り、協同組合主義と集産主義を通過して、絶対自由主義の共産主義に到達する。科学革命が人々を向上させ、人の変革を促して、ゾラが何人かの古代の哲人のように「普遍の愛、永遠の生の流れ」と呼ぶ死そのものとする和解させるのである。<sup>58</sup>

このパラフのようなゾラ読解を、たんに「フーリエ流の空想的社会主義<sup>59</sup>」と整理してしまうのではなく、人権同盟が提示したゾラ理解の1つとして真剣に取りあげる時期が来ているように思われる。今日、「巡礼」の地であるメダンの館が、文学者ゾラの館(Maison

58 Pierre Paraf, «Émile Zola, poète », in *Europe*, n° 83-84, nov.-déc., 1952, p. 44. «Fécondité, Travail, Vérité, Justice, sont des romans de poète. Et Travail en particulier où la petite cité de Beauclair, à travers l'aventure amoureuse de l'ingénieur et de l'ouvrière, entre de plain-pied au pays de l'Utopie et de l'Icarie, passe du coopératisme au collectivisme, puis au communisme libertaire : la révolution de la science ennoblit et facilite la révolution des hommes et la réconciliation se fait avec la mort elle-même que Zola nomme, comme certains philosophes antiques, « le courant d'universel amour, d'éternelle vie ».

59 饗庭孝男(他)『新版 フランス文学史』(白水社、2009年、215頁)。

Zola)とドレフュス博物館(Musée Dreyfus)の総合記念館として生まれ変わっていることは象徴的な出来事であろう。ゾラの文学活動とドレフュス事件という社会的・政治的な出来事をともに記憶する場としてメダンの館は成立したのであり、ゾラの研究もその両面を勘案せざるを得ないのである。